

## 緩和ケアチーム通信 -4月号-

### <スタッフ紹介>

緩和ケアチームの身体症状担当医師の一員で、チームのマネジメントをしている伊藤浩明です。

趣味は、海と山に行く事で、ヨットやダイビング、山歩きやスキー、ボードなど、いろんなことに首を突っ込んでみましたが、最近は時間がとれなくなったり、何より体力が続かなくなって、なかなか出来なくなりました。

現在は、仕事の合間に緩和ケア病棟内で多治見メダカ（多治見市で採取したメダカで、病棟開設時に土岐川観察館のご好意で分けていただき、病棟で繁殖させております。血統書もあるんです！）の世話をし、身近に自然を感じ、心癒されております。

### <チームでの役割>

昨年5月より、緩和ケアチームのマネジメントを担当し、さまざまな職種のスタッフに支えていただいて、チーム活動がどうあるべきか、いろいろな方向性を模索しながら、現在に至っております。まだまだ駆け出しのチーム活動なのですが、各メンバーの熱意を原動力として、これからは患者さんと家族の支えとなり、治療やケアに当たる医療従事者の支えとなる緩和ケアチームを目指して、着実に進んでいきたいと思っております。

### <緩和ケアチームに対する思い>

昨年、チームのカンファレンスで、依頼のあった一人の患者さんについて、じっくり検討したことがありました。チームの輪の中に、患者さんのご家族や主治医、病棟看護師も加わって、患者さんのつらさをいろんな角度から評価したり、そのケアについて各職種からの意見を聞いたりしました。

チームのあり方を模索する一つとして行ったことではありますが、ご家族は、こんなにいろんな人が一緒に患者のことを考えてくれるなんて・・・とおっしゃって、涙ぐまれておりました。また、主治医の先生は、治療以外にも様々な苦痛緩和の手段があることを理解して、それを各職種のスタッフに任せて頂くことができました。

主治医だけでは対応し切れない、様々なつらさに対して、チームの各職種がその持分の力を少しずつ発揮することによって、少しでもつらさを楽にすることが出来たこと、またそのことが大変やりがいのあることだと感じられた、貴重な経験でした。

患者さんは必ずしも治っていくわけではなく、また緩和ケアというと末期のケアという誤解から、チームの関わりを拒絶する患者さんもおおり、スタッフにとってつらいこともあります。チームへの依頼目標を達成することができ、患者さんのつらさが和らいだ状態で過ごせるようになったときは、チームで関わった甲斐があったとうれしく思え、やりがいを感じます。

今後も、チームへの依頼に対して誠意を持って対応することにより、チーム活動を熟成していきたいと思っております。